

ソルフェージュスクール新聞

春夏号

2018年10月14日発行
編集人 吉村隆子
豊島区目白 4-23-10
(Tel) 03-3953-8517

公益財団法人
ソルフェージュスクール

ソルフェージュ&ABC

拍、リズム、フレーズ感
音楽と言葉はつながっています♪



「ソルフェージュ&ABC」は、まだ
はじまったばかりですが、楽曲を産み育んで
きた言語で楽曲に接する経験は、これから音楽表
現を学ぼうとする者にとって貴重な糧となるものと思
います。時代的な背景に対する理解や、作曲家の心理
についての洞察と同じく、言語は文化的背景の前提
であると同時にリズムや抑揚の基礎であるか
らです。
安坂崇 (保護者)

ウフ
音とあそぶ♪カラをやぶり、
いろんな顔がのぞきます



レ・テタール
元気なおたまじゃくしたち
歌うと気持ちいい♪



気軽に参加できるクラス すくすくと成長中♪

スクールでの音楽の 学びは人生の羅針盤

ご縁をいただき、この春より当スク
ールでソルフェージュと器楽をスタートし
た娘ですが、せっかくなので、もっと
さまざまな経験をさせてやりたいと考
えていた矢先、「ソルフェージュ&ABC」
の開講を知りました。4月の半ばから
はじまったクラスですが、さっそく7
月の日本橋公会堂での演奏会で、英語
やドレミの『きらきら星』を歌わせて
いただくこととなり、本人は大よろこび。
自宅での You Tube 特訓が功を奏してか、
レッスン時に発音が良いとほめていた
だけののがはげみとなり、練習を重ね
ての舞台での発表の感動は、かけがえ
のない自信につながったようです。

とき同じく少し遠方の小学校に進学
したこともあり、当初は何かと精神的
に不安定なことも多かった娘でしたが、
吉村先生をはじめとしたソルフェージュ
スクールの先生方のすべてを受け入れ
てくださる包容力と、深いご慈愛に接
し、いつのまにか持ち前の明るさと積
極性を取りもどすことができていました。
これからも、幾度となく困難が襲うこ
とだろうと思いますが、このスクール
での音楽の学びを通じて得られる他者
共感と自己肯定は、どんな灯台よりも
明るく、明確な羅針盤として娘の人生
を導いてくれるものであることを疑い
ません。

奏でることの先にあるものへ。音楽
という人生の伴侶と娘はまだ出会った
ばかりですが、ソルフェージュスクール
での学びを通じて、親子ともども成長
してまいりたいと思います。

安坂崇 / 安坂亜紗 (小1) 父

春のおさらい会

2018年3月21日

はじめてのおさらい会 うれしかった



わたしは小学1年生の12月にソルフェージュスクールに入りました。3月21日は、はじめてのおさらい会でした。おさらい会でわたしはこう思いました。わたしは、れいするときはドキドキしました。ピアノをひいているときは、はずかしくなくて、ドキドキするときもありました。わたしは、みなにみられて、うれしかったです。わたしがひいたきよくは、「とうげのわが家」と「まる木ぶね」です。おさらい会にて、ほんとうにうれしかったです。 木村りおか(小2)

曲への想い、自分への挑戦 を形にできる場

3月21日、春のおさらい会が3階ホールで開かれました。春分の日というのに雪が降りしきる寒い中、お集まりいただきました。そして、ピアノ11人、ヴァイオリン3人(1人はピアノと両方)、ヴィオラ2人、クラリネット1人の16人が練習の成果を披露しました。

はじめての参加の子の初々しさから、大人の方の音楽会といった演奏まで、幅広い内容で楽しめました。おのおの、曲への想い、そして自分への挑戦をしている様子が伝わってきて、おさらい会はそのことを形にできるよい場となると思いました。より音がきれいになってきたり、気持ちを表現できるようになってきたり、みな成長を感じられます。良くなってきたことを自信にして、これからにつなげていって欲しいと思います。 妹尾美紀子(講師)

プログラム

- 1 Pf ビーニー動物園のミレニアム: キャサリン・ロリン
 - 2 Pf とうげの我が家: トンプソン
まる木ぶね: トンプソン
 - 3 Vn メヌエット: ポッケリーニ
 - 4 Pf ブーレ: メトードローズより
ぶんぶんぶん: メトードローズより
 - 5 Pf ガラスのくつ: ギロック
 - 6 Pf 子供の集会: プルグミュラー
 - 7 Pf メヌエット BWV Anh.121: パッハ
貴婦人の乗馬: プルグミュラー
 - 8 Pf 潮風のサンバ: 平吉毅州
 - 9 Pf 即興曲 Op.142 第3番の主題: シューベルト
-
- 10 Vn ソナタ 短調 1,2 楽章: エックレス
 - 11 Pf ガヴォット: パッハ
ワルツ: チャイコフスキー
 - 12 Va 小さなデュエット Op.38-2 1楽章: マザーズ
 - 13 Cl 2Cl と Pf のためのコンサートピースより
アンダンテ: メンデルスゾーン
 - 14 Vn コンチェルト No.1 より 1楽章: アッコーライ
 - 15 Va エレジー: グラズノフ
 - 16 Pf パルティータ No.2 より シンフォニア
サラバンド、ロンド、カプリチオ: パッハ
 - 17 Pf キラキラ星変奏曲 Kv.265: モーツァルト

春のコンサート

2018年4月29日

<リコーダー>

- テレマン/ターフェルムジーク第2集の四重奏曲より
- モーツァルト/5つのディヴェルティメント第2番より
- ボンサー/ヴァレリー フィエスタ

<ヴァイオリンとピアノ>

- ショスタコーヴィチ (レフ・アートフミヤン編曲) / 5つの小品

<ヴァイオリン>

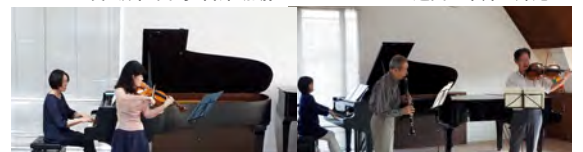
- マスネ/瞑想曲 エルガー/愛の挨拶

<ピアノトリオ>

- ベートーヴェン/ピアノ三重奏曲変ロ長調 Op.11 「街の歌」



Rec 四重奏 坂本 山崎 古澤 加藤 Pf+Vn+Vn 込山 糸井 妹尾



Pf+Vn 加藤 妹尾 Pf+Cl+Va 込山 古澤 林

*なお、リコーダークラスは毎月2回古澤の指導で行われています。小学校で使うソプラノリコーダーが一本あれば、あのアンサンブルを体感することができます。ご興味をお持ちの方は、どうぞお問い合わせください。TEL: 03-3953-8517

春のコンサートは、リコーダークラスの演奏ではじまりました。4種類のリコーダーにピアノも加わり、古典的なものから現代のポップなリズムや響きのものまで演奏されました。アンコールの「アルプスの少女ハイジのテーマ」では客席から手拍子がおき、なごやかにしめくられました。続いては、ヴァイオリン2本とピアノによるショスタコーヴィチの「5つの小品」です。ショスタコーヴィチという革命後の厳しい時代を反映する曲という印象ですが、映画やバレエのための美しい音楽も遺しました。今回は、エレガントさ、軽やかさなどさまざまな表情を持つ5曲が演奏されました。

休憩をはさみ、第2部はヴァイオリンの名曲、マスネの「瞑想曲」とエルガーの「愛の挨拶(あいさつ)」です。これらの曲は、リクエストをいただいたものです。コマーシャルなどでもよく知られている曲ですが、演奏者のそばで聴くと、フレーズの端々(はしばし)の息づかいやピアノとのアンサンブルなど新鮮に聴くことができたのではないのでしょうか。

コンサートの最後は、ベートーヴェンのピアノトリオ「街の歌」でした。この曲は、ピアノトリオとして一般的なヴァイオリンではなくクラリネットが使われています。また今回は、チェロパートをヴィオラで演奏しました。3楽章は変奏曲になっており、当時人気を集めた船乗りのアリアをテーマにしたもので、ベートーヴェンの作品としては、ほかの作曲家の曲を用いることはひじょうに珍しいことです。各楽器が、その時々で互いにバランスを取りながら進んでいくこと、進みながら励まし合ったり、支え合ったり、共に歩んだり…。街の歌を演奏して味わえるこの感覚がこの曲のファンを増やしてきたのだと思います。聴いてくださる方にそれが少しでも伝わっていれば、たいへんうれしく思います。

込山今日子(講師)



春のミュージックキャンプ

3月31日
& 4月1日

アンサンブルって楽しい



シャブリエ 3つのロマンティックなワルツ No.2



シュツ シンフォニア、フィッシャー メヌエット



モーツァルト フルートカルテット

半円が円になり球体になる

キャンプへの申込み後の3月中旬、「今日あたり楽譜が来るかしら」と期待をしながら、わが家のポストをのぞくこと数日。郵送されたスクールからの封筒には、モーツァルトの4手連弾ソナタの1楽章とシャブリエの2台のピアノ連弾「ロマンティックなワルツ2番」が入っていました。シャブリエは、初見で弾いてみたものの、曲の全体像やハーモニー、リズムが把握しにくい上に、2台のかけ合いが入り組んでいます。これは手ごわい!と思いました。そして、練習期間の短さにあせりながらもキャンプ当日を迎えました。

モーツァルトでは、音符の細かいパッセージなど技術ばかりにとらわれずにフレーズを4小節単位で大きくとること、そして小さな転調の色の違いを見過ぎさないことなど指導していただきました。また、シャブリエはこの曲の持つ洒脱(しゃだつ)さ、ちょっとシニカルな部分など教えていただきました。また、今回パートナーの大山さんがヴァイオリンも弾かれることから、2人で事前相談して用意したモーツァルトのヴァイオリンソナタも聴いていただきました。

アンサンブルは2人(今回は)で演奏して初めて1つの曲となります。半円どうしが合わさって円になりさらに球体になる。その表面は最初のうちは凸凹があつて真円からはほど遠い。半分ずつ色も違っているのだけれど、2人で合わせることになめらかなきれいな円に近づいていき、色もまじり合いました新しい色になっていく。そんなイメージを2日間通して感じました。

最終日の発表会ではシャブリエのみの演奏となりましたが、水野先生の「笑顔で」という言葉に助けられ、緊張の中にも楽しく弾けたと思います。2日間たっぷり音楽にひたるといふ幸福な時間を過ごせました。

福島恵子(受講生)

バロックピッチで調弦したチェンバロ

春のミュージックキャンプは、今年も2日間の日程で行われました。2日という短期集中のため、初参加の小学生はもちろん、経験豊富な大人すら戸惑い緊張してしまふとの声も聞かれたものの、始めればすぐに打ち解けて、醸し出す音も柔らかさ、真剣で楽しい時間はあつという間に過ぎていきました。2003年から始まったキャンプですが、今回初めてバロックピッチ(A=415Hz)で調弦したチェンバロを用いて、リコーダーとバルサンティン作曲(イタリヤ)ソナタに取り組むという他ではできない体験(共演)をしていただきました。

※ここで3階ホールにあるチェンバロについて知らない方のために説明します。

スクールの楽器は、装飾を省いたシンブルなもので、アメリカのフランク・ハバード制作のモダンチェンバロ。そもそもチェンバロは600年以上の歴史がある貴族のための楽器で、バロック時代(1600~1750年)の全盛期には宮廷音楽に用いられ、華やかに時代を彩りましたが、18世紀末になるとピアノの発明と急速な発展により、その人気は衰えていききました。チェンバロは弦を弾くことによる振動させて発音する「撥弦楽器(はつげんがつき)」ですが、張力はピアノよりはるかに弱く、演奏者は演奏のみならず、演奏の都度、自ら調律する必要があるという繊細な楽器です。



バルサンティン ソナタ第3番 gminor

ソルフエーjisスクールというところは、そのような体験までできる特別な機会が沢山あり、多彩な編成に挑戦できる環境なのです。2日間なのに発表

会もあるのだからへんなことは確かですが、クセになる・ハマる(笑)キャンプで、一緒に演奏しませんか? 2019年の参加をお待ちしています。山崎孝子(講師)



【チェンバロ豆知識】
<http://www.gakkinosekai.com/blog>
楽器の世界コレクション/音楽雑学ブログ/第7回ピアノとチェンバロの違いを分かりやすく解説!

アンサンブルすることの喜びを

今回の春のミュージックキャンプには13名の方(歌、ヴァイオリン、ヴィオラ、リコーダー、フルート、ピアノ)が参加されましたが、そのうち1人が小学生で、あとは全員が大人の幼稚園のようなにぎやかさはありませんでしたが、それでもたくさん笑い声にあふれた2日間でした。1日目は午前中に2時間、お弁当をいただいた(お花見のようなブルースシートから机になりました!ロウジンには楽です(笑))。午後には3時間の練習、2日目にも午前中にたっぷり2時間。昼食の後はリハーサルと発表会、という室内楽づけの日々を過ごしました。発表会には6組のグループが出演、それぞれの成果をおひろめしましたが、短期特訓にもかかわらず、すばらしい演奏、そして何より心から楽しんでいらつしやる様子が羨ましいくらいでした。スクールはアンサンブルすることの喜びを、1人でも多くの方に知っていただきたいので、楽しくアンサンブル(そして来年の春のミュージックキャンプ)への参加を心よりお待ちしております。

水野紀子(講師)

ソルフェージュスクール演奏会

2018年7月1日

けんちゃん、やっぱり一人で行けるよ!

幼稚園への入園を機に春からソルフェージュスクールに通い、はじめて迎える演奏会。3歳の息子にとってすべてがはじめての経験でしたが、先生方やほかの保護者の方からも温かいお声がけをいただきながら、何とか舞台上上がることができ感謝の気持ちでいっぱいです。

合同練習では、みなさんの輪に入れずモジモジ、当日のリハーサルでも「いっしょに行って!」と私の手を放さなかつた息子ですが、いよいよ本番というところで、急に「けんちゃん、やっぱり一人で行けるよ。お母さんは来なくていいよ!」と。直前に、大好きな吉村先生に声をかけていただいたことで、一歩踏み出せたようです。いざ舞台上上がった後は、たびたび脱線しては先生方に連れ戻していただきき・・・と申しわけなかったのですが、息子本人は「演奏会、楽しかったね! けんちゃん、一人で舞台上がれたよ!」と自信がついたようです。普段のレッスンでも、先生方はマイペースな息子の「やる気の芽」を大切にしてくださいますが、はじめての演奏会も息子にとって《楽しい経験》になりました。

「子ども時代に見た風景」

また、小学生チームによる心洗われるような歌声、そして小学生から人生の大先輩までが一堂に会しての混声合唱。お一人お一人の「子ども時代に見た風景」が浮かび、色とりどりの思いと声が重なって一つの音楽になる。深く深く、胸に響きました。いつも「いたずらがすぎてしかられて」ばかりの息子も、じーっとと舞台を見つめ、聞き入っていました。

「何度も口ずさむ「小さな空」」

すべての演奏が終わると、夫と私、どちらからともなく「素晴らしかったね」と自然に言葉がもれ、帰り道は、覚えてばかりの「小さな空」を家族3人で何度も口ずさみました。

発表会という見ばえや派手さを求めがちですが、ソルフェージュスクールの演奏会は飾らず包容力があり、あらためて音楽の豊かさを教えてくれるものでした。素晴らしい時間をありがとうございました。

伊藤みずほ／伊藤健司(幼)母



リトミックとうた



リトミックとうた

第一部

1. ピアノ連弾 A. ポーランドの古いおどり L. パップ 雨ふり J. ヌイテン
B. ソナチネ Op.24-1 ディアベリ
2. 室内楽 A. ロングロングアゴー ベーリー かつみか雲か ドイツ民謡
B. カルテット Op.18-1 より1楽章 ベートーヴェン
3. リトミックとうた きらきら星

第二部

4. 器楽合奏 ドイツ舞曲 K.V.605-3 “そりすべり” モーツァルト
5. 弦楽合奏 コンチェルト グロツ Op.6-2 ヘンデル
6. 合唱 小さな空 詞・曲：武満徹
主よ人の望みの喜びよ パッハ



理事長 吉村隆子

音符を読んで、リズムにあわせてからだを動かして、からだで音楽を感じましょう♪

初めての演奏会

演奏会でまなちゃんと連弾をしました。秋のおさらい会が終わって、込山先生から「連弾しませんか？」ときかれた時は、それほどピアノが上手ではない私にできるのかとても不安でしたが、練習とともに自信がわいてきました。込山先生と練習するときは楽譜をわすれてきたこともありましたが、先生がねっしんに教えてくれたので日に日に上達していったと思いました。

最後のレッスンではまなちゃんとホールで合わせてみたり、いろんな先生が私たちのために演奏を聞いてアドバイスしてくれました。たとえば右手を弱く弾き、「あのね」「なのよ」のような女の子らしい言葉をイメージするといいて言ってくれたこともあり、ほかにもいろんな先生にみてもらって発表会にむけて自信がわいてきました。発表会当日、やっぱり朝はすごく緊張しました。朝早く起きてかみをきつく結んでもらい、電車に乗りました。リハーサルはバレエのレッスンをやっつてそう、かがみ張りのバーというぼうがあるところでやりました。当日、えびら先生ののどの調子がわるくて大きな声がだせないというハプニングもありました。舞台裏では、すぐくはしゃいでいたが舞台上に立った瞬間とても緊張しました。たくさん練習しましたが失敗もありました。笑顔で演奏会に出ることができてとてもうれしかったです。私は、全体を通じてピアノを弾くことの楽しさを実感しました。また連弾をやりますか？

といわれたら・・・？
もちろんやります！

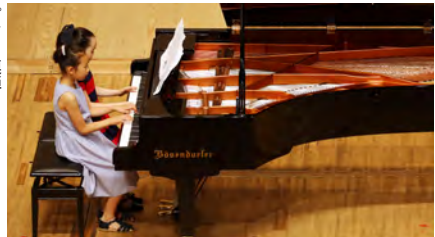
金柚真（小4）



室内楽A



弦楽合奏



ピアノ連弾A



ピアノ連弾A



室内楽B



合唱 小さな空



合唱 主よ人の望みの喜びよ

アンサンブルの経験

七月一日（日）二時より日本橋公会堂でソルフェージュスクール演奏会が開かれました。スクールの教育を演奏により発表する全生徒が参加しての催しです。春と秋にスクール内で開かれるおさらい会は実技レッスンを受けている生徒それぞれが勉強の成果を発表するものですが、この演奏会はスクールが重視するアンサンブルによる演奏で構成されます。このためのリハーサルとしてはソルフェージュクラスあるいは実技レッスンの時間に個々の練習を重ね、六月になつての三日の日曜日に各曲目の全体の合わせをスクールで行いました。

自分の役割の自覚が成長につながる

小さい編成から規模大きな合奏まで、アンサンブルのメンバーにはそれぞれの役割を理解しての演奏が望まれます。とくに1パートをひとり担当する場合はその演奏が全体のに影響するだけに大きな責任を担います。

合奏に初参加の小学生を例にとると、器楽合奏で打楽器を担当することになります。練習を経て曲に求められる音（正しいタイミングとリズム、適切な音量など）が出せたとの評価が伝えられることでその子は自分の役割を自覚でき、それが成長のための自信につながるようになります。

年齢に関係なく学べる

プログラム最後の合唱では小学校低学年の子供から成人によるコーラスク

ラスに加えて父母の有志など、今回も年齢幅の大きい出演者が同じステージの上で武満徹とバッハの曲を歌うことで心をひとつにしました。年齢に関係なく学べるソルフェージュスクールの特徴があらわれた演奏会でした。

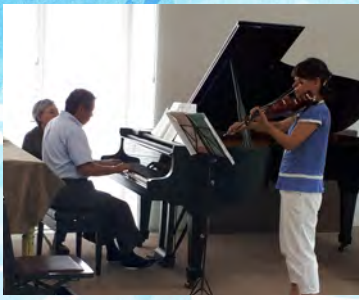
関係者みなさんのご協力に感謝

曲目ごとに異なる舞台のセットイングはスクールOBの大矢真義さんを中心に、出演も兼ねる中学生から成人による八名が協力してあたることのできたことで、プログラムは順調に進行し予定時間通りに終了しました。舞台のお手伝いのみなさん、受付などで働いてくださった後援会役員の方々、また日曜日の練習にご協力くださった生徒さんの各ご家庭に感謝いたします。
古澤裕治（講師）



器楽合奏 そりすべり





Mozart : Violin sonata KV304 (Vn・Pf)



Mozart : Duo (2Vn)

楽しくアンサンブル

7月16日(月・祝) 3階ホールおよび練習室

- ・ Mozart : Duo (2Vn)
- ・ Quantz : Trio sonata (Rec・Vn・Vc・Pf)
- ・ Mozart : Violin sonata KV304 (Vn・Pf)
- ・ 講習曲目
- ・ Brian Bonsor : Jazzy Recorder 1,2 (Rec・Pf)
- ・ 武満 徹 : うたうだけ、翼 (Rec・Pf)
- ・ キャサリン・ロリン : 二人のセンチメンタル・ワルツ (Pf 連弾)
- ・ Martin : L'A.B.C.DU 4 MAINS ほか (Pf 連弾)

「楽しくアンサンブル」はお昼をはさんで午前と午後、みんなで思いきり音楽を楽しむ1日です。年に2回あります。はじめは「初見大会」と言われていましたが、前もって楽譜を見ておきたいという声も聞かれたために初見(初めて楽譜を見て弾くこと)でもあらかじめ予習をしての参加でも良いことになり名前も変更となりました。

今回は参加者が全員成人でした。若い子どもたちの参加がなくて寂しい面もありましたが、参加されたみなさんの音楽に対する気持ちは熱く若々しくて、みるみるうちにそれぞれの曲が楽しくまとまってきました! 音楽には続けていけばいつまでも進歩し続けるという素晴らしさがあることを改めて認識しました。次回は12月23日(日/祝)です。みなさまの参加をお待ちしています!

吉村隆子(講師)



Quantz : Trio sonata (Rec・Vn・Vc・Pf)



Martin : L'A.B.C.DU 4 MAINS ほか (Pf 連弾)

夏季合宿 2018

2018年8月2日~5日
ペンションフェルマータ(甲斐大泉)

合宿の感想

今回の合宿に応募したきっかけは、私の現在のフルート師匠である吉岡次郎先生から笠井潔先生(笠井先生は吉岡先生がバーゼルに留学していた頃の師匠)が教えられる合宿があるということをご紹介いただき、また、笠井先生は私が日課練習として使っている「チェックアップ」という本の訳者であることを存じ上げていたので、たいへん興味があり、今回の合宿に応募いたしました。

いろいろお話を聞いて、びっくりしたのは、笠井先生はバーゼル音楽大学のお仕事を辞められてからフルートを吹いておらず、この合宿のためにフルートを再開されたとうかがったことで、この合宿にかける笠井先生のたいへんな熱意が感じられました。

笠井先生のレッスンで厳しく言われたのは、強弱のダイナミクスをもっとつけることで、いつも音を前に出すことだけを考えて吹いていた私にとっては、たいへん貴重なひと言でした。また、吉岡先生からも前から言われていたのですが、16分音符が4つ並んでいて、最初の2つにスラーがついている音形の場合、私は、最初の2つのスラーの音がなぜか、早くなってしまうくせがあり、今回も笠井先生からその点を指摘されましたので、今後、鋭意(えいい)注意したいと思っております。

笠井先生のレッスンでは「The Singing Flute」を使ったレッスンがユニークでした。本来は移調まですれば良かったのですが、移調は難しいので、指定された楽曲の歌わせ方、強弱のつけ方、替え指などを指導していただくだけでも十分でした。また、笠井先生は食事の時間でも、ご自分の経験などを雄弁に語ってくださるので、笠井先生のお話をうかがうだけでも、本場ヨーロッパのフルート演奏の歴史に触れられるようで、たいへん貴重な経験でした。一方、今回の合宿にご参加されていた方々には有坂先生や大岩先生など、大学教授を歴任されていた方のお話をうかがう時間もたいへん有意義でした。

今回の合宿は、弦楽器の方が入っていた点で通常のフルート合宿とは異なっており、普段あまり弦楽器とアンサンブルをする機会のないフルート奏者にとっては、たいへん良い機会だと思いました。

最後のダイニングカフェ・パウゼでの演奏会は、素晴らしいホールにたくさんのお客さまに来ていただき、合宿最後にふさわしい演奏会で、とても良かったです。(自分の演奏がもっとましなら良かったのですが、...)

最後になりましたが、ていねいなピアノ伴奏をしていただき、練習にもたくさんつき合ってくださいました込山今日子さんに、深謝申し上げます。

石野裕一(受講生)

夏季合宿 2018 は、

講師にフルーティストの笠井潔氏をお迎えしました。笠井氏は長年バーゼル交響楽団のソロフルーティストを務められ、バーゼル音楽大学で教鞭を執られました。この合宿へ寄せていただいたメッセージの通り、音楽に対する素晴らしいお考え、ご経験を日本で初めてのレッスンを通して伝えてくださり、素晴らしい貴重な合宿でした。
- 吉村隆子 -



笠井 潔 =プロフィール=

1947年生まれ。中学生の時にフルートをはじめ、比田井洵、奥好寛、吉田雅夫の諸先生に学ぶ。東京大学理学部数学科卒業後、1970年スイス、チューリヒ音楽院に留学し、アンドレ・ジョネ教授に師事。1973年ジュネーブ国際コンクールにて銅メダル獲得。1975年チューリヒ音楽院を演奏家資格試験、最優秀で卒業。同年バーゼル交響楽団にソロフルーティストとして入団し、2009年まで34年間その任にあたり、定年退職。1987年-92年カールスルーエ音楽大学講師、1999年-2012年バーゼル音楽大学フルート科教授。室内楽ヤソリストとして、ドイツ、フランス、スイスなどで活動。2002年、皇后陛下バーゼルご訪問の折にはフルートと尺八の為の「秋の風」(Gerald Bennettがこの機会のために作曲)を歓迎式典で演奏。ペーター＝ルーカス・グラーフの依頼によって彼の著書、「Check up」と「The Singing Flute」を日本語に翻訳

日本でのレッスンを終えて=笠井潔

バーゼル音楽大学で2人の日本人学生にレッスンしましたが、今まで日本でレッスンをしたことはなく、今回の講習会に参加させていただいて、日本の音楽を愛する方たちに、自分がヨーロッパでいろいろな人から学んで得られたものをお伝えできればと願っていたわけですが、実際にはどうだったのか、夏季合宿のことを思いつくままにいろいろと書いてみます。

今回の合宿は講習会的な面と室内楽合宿の面を両方持っていたと思います。どっちつかずとも言えますし、それだけに大変ユニークなものだったとも、あるいはちょっと欲張ったと言えるかもしれません。その点では、日程的に正味まる三日はギリギリの線だった感じです。欲をいえばもう一日欲しいところでした。それでも、あとから見て一応それなりにやれる範囲で最大限やれた感じです。例えば土曜日の午後に全員で集まって他のグループをその段階で互いに聴きあえたのも良かったし、明るく日の演奏会の良い準備になったようです。選曲や曲の割当のようですが、よくピッタリと参加者の数や程度、希望に添えたと思います。素晴らしい偶然でした。レッスンを思い出すと、できる限りのことをしたといえますが、あれも言いたりなかった、これも言いたかったなど、今ごろになって思いつきます。とはいえ、みなさんがそれぞれ何か一つでも持ち帰ってこれからの発展進歩の役に立ててくれればと願うのみです。発表会の場所も素晴らしかったです。場所が変わると演奏する方も気分が新たにりますし、格別な雰囲気もあって適度な緊張感をもたらした感じでした。

<参加者> フルート5名 ヴァイオリン2名 ヴィオラ1名
チェロ3名 ピアノ2名

<ミニコンサートで披露した講習曲>

ペーター・ルーカス・グラーフ The Singing Flute から5曲 FI
モーツァルト アンダンテ ハ長調 KV315 FI+PF
ハイドン ロンドン三重奏曲 ハ長調 Hob.4-1 1,2,3 楽章 FI+Vn+Vc
モーツァルト フルート協奏曲 二長調 KV314 1,2 楽章 FI+PF
ウェーバー 三重奏曲 ト短調 Op.63 1,3 楽章 FI+Vc+PF
モーツァルト フルート四重奏曲 二長調 KV285 1,2,3 楽章 FI+Vn+Va+Vc



ハイドン ロンドン三重奏曲



ウェーバー 三重奏曲



モーツァルト アンダンテ、フルート協奏曲



モーツァルト フルート四重奏曲

亀井由紀子特別公開レッスン

〈8月10日 ソルフェージュスクール3階ホール〉

ヴィヴァルディ／コンチェルト イ短調 第3楽章
ベートーヴェン／ソナタ No.5 スプリング
バッハ／ソナタ No.2 第2楽章 Fuga

私が学んだ大村多喜子、ヤッシャ・ハイフェッツ両先生のまったく違う教え方の中心に共通してあったのは、音楽を学ぶ＝楽譜をよく解読する、という姿勢であり、また、歌をうたう、ピアノを弾く、ヴァイオリンを弾く、室内楽をする、ことでした。室内楽をかたっぱしから弾きまくるたのしさの中に、音楽を深く理解し、演奏スタイルを習得する訓練がありました。両先生から教えていただいたヴァイオリンの美しさへの強烈な憧れは消えることはありません。日本とアメリカで私が得た音楽体験から「ヴァイオリンを通して、何を言いたい?」ということをご一緒に共有していきたいと願っています。 亀井由紀子



亀井由紀子 東京生まれ。幼少よりヴァイオリンを大村多喜子に師事。ソルフェージュスクール発足時よりソルフェージュ、和声、合奏、室内楽を学ぶ。ヤッシャ・ハイフェッツの日本人初の弟子となり、彼のマスタークラスで7年間教えを受け、その後アシスタントを務める。カリフォルニア大学ロスアンゼルス校とペパーダイン大学で教鞭を執った後、1993年にサンフランシスコ交響楽団に参加し現在に至る。

音楽に対する深い経験、情熱と理解

亀井由紀子先生の公開レッスンを聴講しました。2016年にはじめて聴講し、以来毎年楽しみにしてきて、今回は3回目です。毎回感じるのですが、お手上本に弾いてくださる先生のヴァイオリンが、温かみのある豊かな音色で、とても魅力的です。音楽に対する深い体験と真摯な姿勢が感じられ、これだけでも聴講する価値があると思っています。今回の生徒さんは3組で、一人あたりの時間も十分とれて、充実した素晴らしいレッスンでした。

先生のレッスンで感じるのは、生徒のつくってきた音楽を尊重しつつ、改善点について、的確に、生徒ができることを指摘してくださることです。また、実際に弾いて見せてくれて、その指導が具体的にわかりやすいので、生徒の演奏が確実に良くなっていきます。たとえば、弓の上半分だけを使うことで音豊かになり、弓を幅広く使うことで音楽が豊かになりました。4重音の4弦を同時に弾こうとしていた生徒は、2弦ずつ分けて弾くことで、きれいに響いて和音が聴きとれる音楽になりました。生徒のどんな質問にも真摯に答えてくださる亀井先生の回答には、音楽に対する深い経験、情熱と理解が感じられます。生徒さんからスケールの練習の仕方について、先生が現在行っている方法をいねいに教えていただきました。ピブラートはかけず、音程と各ポジションでの手の形を確認することに重点をおいたスケール練習で、実際に演じていただきました。

今回のレッスンでいちばん印象に残ったのは、「弾き方よりも、いい音を出すことを心がけるように」という先生の言葉です。「いい音」を意識し追求することで、ヴァイオリンも上達し、いい音楽を表現できるようになるのだと思います。来年もぜひ聴講したいです。

藤森正志(室内楽クラス)

[10月から2019年3月までの予定]

- 10月14日 ウフ、レ・テータル、ソルフェージュ& ABC
- 28日 秋のおさらい会
- 11月 8日~12月6日 大人の講座全5回
- 11日 ウフ、レ・テータル、ソルフェージュ& ABC
- 12月 1日 ウフ
- 2日 レ・テータル、ソルフェージュ& ABC
- 16日 クリスマスコンサート
- 21日 二期授業終了日
- 23日 楽しくアンサンブル

〈冬休み 12月22日~1月9日〉

- 1月10日 三学期授業開始日
- 20日 ウフ、レ・テータル、ソルフェージュ& ABC
- 2月24日 ウフ、レ・テータル、ソルフェージュ& ABC
- 3月10日 ウフ、レ・テータル、ソルフェージュ& ABC
- 21日 春のおさらい会
- 23日 三学期授業終了日
- 30、31日 春のミュージックキャンプ

〈編集後記〉



これまでになく多くの外部受講生を迎え、スクールならではの音楽教育の特色を感じてもらおう好機となった夏季合宿でした。タイムリーなスクール活動をもっと多くの外部の方に知っていただくために、どんな広報していきます。ホームページ、facebookをお見逃しなく!!!

(了)

〈平成29年度の表彰〉
皆勤賞は7名、
精勤賞は6名でした。
がんばりました!
おめでとう!!!

すてきな賞品です!!!

